

項目	経営	本年度の重点	具体的な方策	職員評価				教員による分析結果	教員による改善策	学校運営連絡協議会委員による評価		学校の見解と方向性
	目標			A	B	C	D			評価	コメント	
力を付ける授業	分かる、楽しい、学びがいのある授業がある学校	主体的な学びを推進し、学力を伸ばす	①「豊かな学びの場わかくさ」の視点「わくわく、かかわり、くふう、さいご」をもとに授業改善に取り組む。	41%	59%	0%	0%	○受け身ではなく、主体的に学習していけるように意識をして取り組んでいる。 ○特に国語、算数は授業の計画と振り返りを行い、授業の改善に努めた。		A1	・小黒板に、授業の課題を書き、明確に課題を提示している授業が多い。 ・主体的に学習する様にする事は大事な事ですが、そこに意識して取り組んでいる事で授業の改善に努めている事はよいと思います。 B2 ・本気で熱心に取り組んでいるが、授業改善まで意識しているか、よくわからない。 ・幼保小連携を進めていけたらと思っています。よろしく願い致します。 C0 ・例えば、グループ活動や探究型学習の場面で、自ら課題を設定し、試行錯誤しながら解決策を見出すプロセスをより明確に位置づけるとさらに深い学びにつながる。 D0 ・振り返りを通じて「学んだことの意味」や「次の学びへのつながり」を実感できる仕組みを取り入れることで、より継続的な学習意欲の向上が期待できるのではないか。	・主体的な学び(わくわく学ぶ)となるよう、学習課題の設定を工夫したり、子供自身が課題を選んだり決めたりできるような授業を展開していく。 ・対話的な学び(関わりの中で学ぶ)を重視し、自分の考えを発信したり友達のことを聞いたりすることで、考えを広げたり深めたりできる場を意図的に設けていく。 ・深い学び(工夫して学ぶ)となるよう、学ぶ目的をもたせたり、学んだことを活用できる場面を設けたりしていく。 ・粘り強さ(最後まであきらめずに継続して学ぶ)を引き出すために、褒める言葉や励ましの言葉を掛け、頑張りを価値付けていく。 ・「先生に教えてもらう」という受け身の態度から、「自分で学ぶ」という能動的な態度へと、子供の意識を変えていく。
		よりよい学習力態を身に付けさせ、	②学習規律、学習習慣を身に付けられるように「若草小学びの約束」などをもとに系統的で継続した指導を徹底する。	44%	56%	0%	0%	○学期ごとに指導をすることを増やし、徐々に子供たちができるようになった。 ●発言しやすい環境づくりの結果、私語が増えてしまった。 ●周知はされているが、徹底の仕方が学年により違いがある。 ●「若草小の学びの約束」を見て、指導につなげることはできていない。 ●「若草小学びの約束」の教員の周知があまりできていない気がする。	・学年主任を中心に校内で統一する意識で指導する。 ・「きりかえ」をキーワードとし、状況をしっかりと考えて発言できるようにする。 ・4月の職員会議等で共通認識として時間を取って話すべきだと思う。 ・「若草小の学びの約束」を見て、基本的な指導を徹底する。	A0	・「学びの約束」を徹底したほうがよいのではないかという先生方の反省にある。学年により徹底に違いがあるのは望ましくない。徹底させるのに、特に高学年は難しい面もあると思う。当たり前のことが当たり前に行える児童であって欲しい。 B3 ・教員共通認識として時間を取って話をしても逆に負担になるので、重要な点をまずは月間目標などで教員が周知すれば良いと思います。 C0 ・「発言しやすい環境づくり」や「学習への取り組み方の指導」が、子供たちの意欲向上につながっている点は評価できる。効果を高めるためには、家庭との連携を強化し、学校での学びを日常生活にもつなげる工夫が有効かもしれません。	・学習規律や学習習慣を身に付けることは、学力の定着と向上を図る上での基盤となることから、学校全体で徹底していく。 ・教員全体が、「若草小の学びの約束」をしっかりと理解し、守っていくという共通認識をもつ。約束の内容については、児童の実態等を見ながら改善していく。 ・学習習慣を付けるために、家庭と協力しながら、粘り強く取り組んでいく。
		多様なICT授業を展開する	③一人一台端末やデジタル教科書、電子黒板等を活用することで、児童が主体的に学ぶ多様な授業を展開する。	52%	48%	0%	0%	○端末でスライドにまとめるなど、とても意欲的に取り組めている。 ○電子黒板を活用し、視覚的な教材提示を心がけている。 ○デジタル教科書を効果的に活用している教員が多い。 ○児童が教材を用いて自発的に学習に取り組む姿勢が見られた。(漢字など) ○デジタル教科書や電子黒板は毎日活用できている。 ○デジタル機器を当たり前に使えている。 ●タブレットを子供が道具のように使うには至っていない。 ●タブレットを取り入れた学習ができていない。 ●使用する意欲はあるが、教員側の技術が追いついていない。 ●デジタル教科書や電子黒板は活用できたが、児童用端末の活用は少なかった。	・今後はどのような場面で活用できるかを考え、適切に使っていく必要がある。(使い過ぎに注意) ・一人1台端末はあまり使えていないので積極的に使っていく。 ・ICTを効果的に使うことができるように使用する場面を精選する。 ・2・3月中に来年度の取り組み計画を立てるとよい。 ・低学年で使いやすい教材等を紹介する研修会等を設けていきたい。(個人で研修しなくてはいけないかもしれないが。)	A2	・デジタル教科書、電子黒板を使いこなし、授業の中で生かされている。低学年から高学年まで、子供たちはタブレットを使いこなしている。先生方のご指導の成果であると思う。 B1 ・タブレットを取り入れて授業をしていて時代に沿っていると思う。低学年でも使いやすい教材の研修会を個人で研修してでも知りたいと言う教員の考えに感銘を受けました。 C0 ・(探究型学習において調べ学習だけで終わるのではなく、得た情報を整理・分析し、自分の意見をまとめて発信するプロセスを重視することで思考力や表現力の向上につながる) ・デジタル機器の活用と並行して、「書く」「話す」といったアナログな学習とのバランスを取ることも大切かと思います。ICTを活用する場面と、紙のノートを使って整理・振り返る場面を組み合わせることで、学びの定着がより促進される。	・授業の中でICT機器を活用する場面が増え、効果を上げている。特にデジタル教科書を使った提示によって、子供たちは視覚的に学べるようになった。 ・一人一台端末の利用は、調べ学習や学んだことをまとめて発表する際に多く活用されている。今後は、子供たちが思考力を働かせたり、協働的に学んだりするために、どのようにICTを活用できるか研修していく。 ・また、デジタルドリル等を活用して、基礎学力定着を図っていく。

項目	経営	本年度の 重点	具体的な方策	職員評価 上段取組 下段成果				教員による分析結果	教員による改善策	学校運営連絡協議会委員による評価		学校の見解と方向性
	目標			A	B	C	D			評価	コメント	
豊かな体験	多様で豊かな直接体験の機会がある学校	多様な体験の機会を設定し、児童の視野を広げ、学習意欲につなげる	④豊かな直接体験の場として、ゲストティーチャーや地域人材を活用した授業を各学年で実施する。	31%	65%	4%	0%	○図工で作ったものづくりの出前授業や選挙の出前授業がよかった。 ○どの学年でも外部の人材を生かした授業を行っていたので、今後も継続していけたらいいと思う。 ○学年で相談し、たくさんのゲストティーチャーを呼び、実施した。 ○生活科を通しての学習や、図工の造形遊びなどでは、児童の思いが生かせるように準備して取り組んだ。 ○アートイヤーと関連した直接体験を行えるゲストティーチャーを呼ぶことができた。 ●ゲストティーチャーを呼ぶことがあまりできなかった。 ●地域にどんな方がいらっしゃるのか把握しきれていない。また、日程調整が難しく、活用する機会が少なかった。	・学年の実態に合わせて出前授業を選択する必要がある。 ・教科ごとに必要な際は積極的に活用していく。 ・地域にいらっしゃる活用できる人材を学校として把握するようにする。(個人で知っているのでなく) ・展覧会の廃棄のものを使わせてもらって、充実した学習にできた。	A 2	・ゲストティーチャーを招聘して授業、子供たちにとっては、興味をもち、意欲的に取り組めたと思う。 ・地域の人が授業協力できたら、さらに良いと思う。 ・外部の人を呼んで様々な分野の事が学べるのは子供たちにとってすごく貴重なことだと思う。また、ゲストティーチャーとの日程調整等で教員の負担が増えた事と思いますが、とても良かったと思います。 ・実際に社会で活躍されている方々から直接話を聞いたり、実践的な活動を体験したりすることで、教科書の学びを超えた「生きた知識」を得ることができるのは大きな魅力である。 ・地域の方々が学校教育に積極的に関わることで、子供たちだけではなく、地域全体の学びの場としての広がりも期待できる。	・直接体験の場を設けることは、より専門的な学習ができ、子供の意欲や興味・関心を高めることにつながっているので、今後も継続していく。 ・若草小の学校経営方針や教育計画を基に、授業の内容を検討していく。 ・各学年の取り組みで有効だったものは、次の学年担任にしっかりと申し送りをしていく。同時に、学校全体で情報を集め、新たな体験授業の開拓を行っていく。
			⑤「わかくさアートイヤー2024」と位置付け、芸術に親しむ機会や環境をつくり、関心・意欲を高めるための活動を推進する	43%	53%	4%	0%	○サンドアートなどの芸術的活動に触れさせることができた。 ○芸術に特化したゲストを呼べた。 ○会社活動などでイラストを描くなどの取組をクラスで行うことができた。 ○アートイヤーで企画された行事や校内掲示などにより、芸術への関心・意欲が高まった。 ●いろいろな取り組みは良いが、教員(特に図工専科)の負担が多い。壁面アート、共同作品、造形活動など、多くの活動を行った。年間を通しての活動が難しい。 ●行事以外でのクラスでの取り組みはあまりできなかった。 ●図工の授業だけに偏ってしまったため、学級での取り組みはあまりできなかった。 ●展覧会の共同作品についての取り組み方を児童からの要望やこんなことがやりたいなどの意見の集約をしたほうが盛り上がるのではないかと。	・取り組む活動を減らし、負担をかけずに実施できるようにする。 ・色々な場面でアートに親しめる機会をつくっていく。 ・児童がアートに親しめる活動を増やしていく。 ・大筋は伝わっていたが、各学年で話し合う時間を設けて、それらを委員会に預けるというほうが、柔軟に取り組めるのではないかと。	A 3	・体育館で参観させていただいたが、どの子の作品も素晴らしいかった。その半面、時間が相当かかっているとも感じた。 ・芸術に特化してゲストを呼べて、子供たちが芸術活動に身近に触れたのは良かった。サンドアートはとても良かったです。 ・芸術は、子供たちの感性を豊かにし、自己表現の幅を広げるだけでなく、創造力や想像力を育む重要な要素である。 ・図工の授業だけでなく、さまざまな場面で芸術に触れる機会を設けていることは、とても意義があると考ええる。作品制作や鑑賞の機会を通じて、子供たちが自ら表現する喜びを感じたり、多様な価値観に触れたりすることは、学びの幅を広げる貴重な経験となる。	・芸術に親しむ機会を充実させるため、今年度は「アートイヤー」を位置付けた。来年度は、「ミュージックイヤー」とし、年間を通じて文化的な取組を行っていく。 ・外部機関やゲストティーチャーを招へいし、体験的な活動を計画的に実施していく。 ・子供が主体的に取り組めるよう、内容や実施方法を工夫していく。
			⑥自尊感情・自己肯定感を高めるために、自分の判断や行動に自信をもたせたり、自分のよさを感じたりできる言葉掛けを行う。	70%	30%	0%	0%	○言葉掛けをたくさん行うことで主体的に取り組む児童が増加した。 ○一人一人に合わせた対応を意識した。 ○できるだけ多くの児童に声をかけたりコメントを書いたりしている。 ○子供に常にどうしたらよいかを考えさせ、行動したことを価値づけている。 ○言葉掛けはエールウィーク等を通して行うことができた。 ○子供たちには意識して言葉掛けを行っているが、教員同士でも行うことができると、よりよい反映につながるのではないかと。	・子供たちだけではなく、教員間でも行っていく。 ・自己肯定感の向上はすぐに表れるものではないので、続けて、一人一人に合わせた具体的な声を掛けを行っていく。	A 2	・一日一回は、ほめられたり、認められたり、先生から声をかけてもらったり、全員の子が味わうことができた素晴らしいと思う。特に叱られることが多い子、目立たない子、にはうれしいと思う。 ・子供たちだけではなく、教員同士でも行えればそれが子供たちの手本になるのではないだろうか。 ・子供たち一人一人の良さを認め、具体的な言葉で伝えるよう意識されていることは、とても素晴らしい取り組みである。「頑張ったこと」や「できるようになったこと」に注目し、それを肯定的にフィードバックすることで、子供たちが自分自身の成長を実感しやすくなる。 ・結果だけでなく、「努力の過程」や「挑戦しようとした姿勢」に注目し、「やってみようとしたことが素晴らしいね」「工夫したことがよく伝わるよ」などの声掛けをすることで、子供たちは「自分の努力が認められている」と感じ、さらなる自信につながる。	・エールウィークを中心に、学校全体で子供への声掛けを意識的に行うことができた。これからも継続していくとともに、日常的に、子供の自尊感情や自己肯定感が育つ声掛けを行っていく。また、子供同士でも互いを認め合う言葉掛けができるよう、価値付けを行っていく。 ・授業においても、校内研究会で研究してきたことを活用して、子供一人一人の頑張りを自他ともに認め合い、伝え合う活動を行っていく。
			⑦障害のあるなし、得意不得意にかかわらず誰もが安心して学べる学習環境をつくる。(特別支援教育への理解)	46%	43%	11%	0%	○得意、不得意にかかわらずみんなそれぞれの特性をもっていることを理解させることが大切。 ○わかくさ学級との交流も一部ではあるが積極的に行っている。 ○学校で統一された教室環境が提示されているので、分かりやすかった。 ○壁面アート、共同作品では固定級との交流をすることができた。 ○視覚支援を用いたスライドを授業に取り入れた。 ●交流学習のハードルは低いが、計画的に行えていない。 ●理解できるほど交流していない。 ●交流の意識がうすかった。 ●交流の場がもう少し増えたとよい。 ●道徳の教科書には、障害の内容が少ない。	・その人に合わせた指導、声掛けが必要。特別扱いをしているわけではないことを児童にも伝えていく。 ・一緒にできる授業や取り組みがあれば一緒に行う。 ・年度当初に交流計画の作成を行う。 ・交流を増やし、通常、固定で一緒に取り組みたい。 ・学年でよい本やお話を集めて、授業に生かしたい。 ・今後は意識したい。 ・交流の場面を増やしていく。「わかくさ学級とは？」といった説明をしっかりと行っていく。 ・特性上、気になる情報を極力控える児童がいるため、掲示方法を改善していく。	A 3	・人権を尊重して差別のない、安心して学べる学校、クラスに是非お願いしたい。 ・優しい気持ちの子供たちが多いと感じている。 ・どの学校も抱える課題だと思います。子供の権利条約を元に青梅市こども計画の中でも「こどもまんなか社会」実現に向けて策定されました。すべての子供たちがいつも満たされて笑顔でいられるように尽力していきたいと思っています。 ・差別ということがあってはならないのですが、低学年の子供たちには難しい事だと思う。しかし、学校側が交流学習の場を設けることはとても良い事だと思う。 ・すべての子供たちが「自分のペースで学び、自分の良さを生かせる環境」を整えることは、互いの個性を尊重しながら共に成長していく大切な基盤となる。「多様な学び方に対応する授業づくり」や「支援が必要な児童への適切な配慮」に求められていることは、子供たちの安心感や学習意欲の向上につながる大きな要素である。また、合理的配慮を意識しながら、一人一人の特性に応じた指導が行われている点も素晴らしいと思う。	・人権教育は、道徳の授業だけでなく、日常生活のあらゆる場面において、引き続き行っていく。 ・子供の中に、互いの違いを認め合い、尊重し合う心が育ってきている。指導が必要な場面があればその機会を逃さず、子供自身に考えさせていく。 ・わかくさ学級との交流活動を計画的に行っていく。

項目	経営	本年度の重点	具体的な方策	職員評価 上段取組 下段成果				教員による分析結果	教員による改善策	学校運営連絡協議会委員による評価		学校の見解と方向性
	目標			A	B	C	D			評価	コメント	
地域	地域の教育力を生かす学校	自学できる学習習慣の定着を図り、連携	⑧小・中学校で共通して家庭学習強化週間の機会を設定し、家庭学習を計画的に行う習慣が身に付くように啓発する。（小中一貫教育の視点）	37%	56%	7%	0%	○毎学期、啓発し保護者にも伝えた。3学期は99%達成。 ○出された課題にはきちんと取り組めている。 ○毎日、一定数の宿題を出している。 ○小中の取り組みはとてもよい。高学年の学習方法について向上させたい。 ○学期に1回全校での取り組みがあるので定着してきた。 ●家庭学習頑張ろうカードのみの実施のため、計画する習慣までは至らなかった。 ●小中一貫教育の時はよいが、その後の取り組みが、意外と消極的な場合が多い。		A1 B2 C0 D0	・家庭学習は、保護者の理解や協力も必要となる。学校、学年、担任からの粘り強い依頼等が必要になる保護者もいる。保護者が家庭学習を通して子供の様々な理解を深める手立てとらないだろうか。忙しいためか、関わりの少ない保護者を少しでも関わらせたい。 ・家庭学習については各家庭でということになってしまうが、毎日、一定数の宿題を出しているのも大事かもしれないが、学習方法を子供たちに教えてあげ、低学年の時から自分の学習方法を身に付けられれば良いかと思う。 ・小学校から継続的に学習習慣を身に付けることで、中学校進学後の学習へのスムーズな移行が期待できるため、このような統一した取り組みは大きな効果をもたらすのではないか。「どのように学習を計画し、振り返るか」という点を重視しながら指導されていることは、単なる宿題の提出ではなく、自分で学びを管理する力を育てるという観点からも重要である。特に、学年ごとに適した目標を設定しながら、少しずつ「自分で考えて学ぶ姿勢」を養っていく取り組みは、子供たちの主体性を伸ばす良い機会になっている。	・家庭学習の習慣をつける意義を保護者の方へ説明し、ご協力をいただく。 ・子供が宿題等の家庭学習を「やらされている」という意識から、「自分のために自ら取り組む」という姿勢に変えていく必要がある。 ・子供が自分の課題を見つめ、学習内容を決定したり、1週間の計画を立てたりできるような取組を増やしていく。
				29%	64%	7%	0%					
その他の視点	教育環境整備	整えられた環境づくり	⑨ユニバーサルデザインを意識した統一した教室環境を行い、学びの場としてふさわしい整った環境をつくる。	57%	39%	4%	0%	○教室がきれいだと清々しい気持ちになることを伝えていく。 ○学校で統一された教室環境が提示されているので、分かりやすかった。 ○教室前方は授業に集中できるよう、環境を整えている。 ○めあて黒板や、教室掲示の配置を統一していてよい。 ●教室内が狭く、荷物を掛ける場所やしまう場所が少ない。 ●1・2年生の教室の側面と背面の掲示板はクロスが汚いため、模造紙を貼って対応している。	・可能なら廊下側の棚の撤去。 ・1年生の教室なので、もう少し予算をかけて、迎えたい。	A2 B1 C0 D0	・教室の前面は整頓され、すっきりしている教室が多い。 ・Labo教室廊下側、保健室廊下、図書室廊下、昇降口入口等の掲示が特に工夫されている。 ・ポスター等古い掲示物や破れた掲示物がない。 ・教室がきれいで各教室が統一されているのは子供たちの気が逸れない等、良い事だと思いますが、全体的に教室の照明が暗いと感じます。 ・学級の目標が掲示されていない教室もある。ないクラスもある。担任の願い、子供の思いが学級の目標であって欲しいと思うが。 ・学びの場としてふさわしい環境を整えることは、単に教室の整理整頓にとどまらず、子供たちの集中力や意欲を高め、よりよい学習成果につながる重要な要素である。掲示物の見やすさや座席配置、音環境や光の調整など、細やかな工夫をされていることは、すべての児童にとって「安心して学べる場」づくりにつながるものと思う。	・子供が授業に集中できる教室環境づくりを統一して行うとともに、子供の学びの成果を見合える掲示を行っていく。 ・荷物を置く場所やかける場所が少ないが、落ちていたら気付いた人が直すようにしていき、環境が整っていることの気持ちよさを感じさせていく。 ・教室や廊下の照明は、来年度にLEDに交換されるので、明るくなると考える。
				50%	46%	4%	0%					
その他の視点	教育環境整備	児童・保護者の立場に立った対応	⑩受容的な態度で丁寧に児童と接し、安全への配慮や安心して相談ができるようにする。また、保護者との情報共有を行い、信頼関係をつくる。	69%	31%	0%	0%	○児童や保護者に寄り添って話を聞いた。 ○毎日のように、classroomから、一日の様子をお知らせするようになっている。	・読まない人もいるので、朝の個人の出欠の確認の時にも個人あてにお知らせを流したりしている。	A3 B0 C0 D0	・子どもと担任、保護者と担任。望ましい関係が出来ているのではない。 ・先生方は子ども、保護者の話をよく聞き、適切に対応していると思う。 ・昔の様に子どもたち、その家庭と深く付き合うことはできないとは思いますが。しかし、教員は限られた中で寄り添って対応していると思う。 ・保護者との情報共有を通じて信頼関係を築くことは、学校と家庭が協力しながら子供たちを支える基盤となり、よりよい環境の実現につながる。日々の声掛けや関わりの中で子供たちの気持ちを尊重し、一人一人を大切にした対応を心がけておられることは、子供たちにとって大きな安心感につながることであろう。 ・些細な変化にも気付き、適切にサポートすることで、子供たちは「自分を理解してくれる大人がいる」と感じ、自己肯定感を高めることにもつながる。	・Googleclassroomや電話連絡を通して、保護者の方と小まめな情報共有に努めてきた。来年度は「まなびポケット」での連絡に移行するが、引き続き、丁寧な対応を心掛けていく。 ・相談事は、担任だけでなく、学年の先生、養護教諭、管理職、また、スクールカウンセラーと、学校全体で応じている。子供や保護者の方が安心できるよう、寄り添っていく。
				48%	48%	4%	0%					
生活指導	生活指導	社会性の向上	⑪児童が集団生活のルール、マナー(挨拶、時間を守る、廊下歩行など)社会性が身に付くように指導をする	63%	37%	0%	0%	○できている。 ○意識してできるよう、常に声かけは行い、できることが増えている。 ○代表委員会の若草広場の歩行についての放送や、生活レンジャーの実演がよい。 ●態度(廊下の歩行の仕方)・話し方(言葉遣い・記名の仕方)などを丁寧に指導してきた。しかし、言われないとできないことが多い。 ●日々、指導はしているが、児童への身に付き方は差が大きい。特に廊下歩行については大きな課題がある。 ●ノーチャイムで時計を意識するのはいいが、要所にチャイムがあった方が切り替えになる。 ●指導はしているが、社会性の向上は見られない。	・チャイムについては今後課題が残っている。 ・すべてではなく必要な大切なところだけチャイムを取り入れる。 ・素直な時期の1年生なので、できたらほめる、できないときはやり直しという方法で、できるようにした。 ・特効薬は残念ながら見つからない。繰り返し廊下を走ることの危険性を伝えること、先生は見ているという意識をもたせることを行っていく。	A3 B0 C0 D0	・ルール、マナーは身についている児童が多いのではない。 ・挨拶はとてもよくできていると思う。チャイムに関しては、ノーチャイムにしてしまうと子どもたちが余計に時間を意識してしまい、授業中(終わり頃に)集中が途切れてしまうのではないかと思う。 ・児童が社会生活のルールやマナー(挨拶、時間を守る、廊下歩行など)を身に付け、社会性を育む指導は、学校生活だけでなく、将来の社会生活にもつながる大切な取り組みである。 ・子供たちがルールの意味を理解し、自ら意識して行動できるようになることは、安心・安全な学習環境の確保にもつながる。単に「ルールだから守る」という指導ではなく、「なぜそのルールが必要なのか」という理由を伝えることで、子供たちが主体的な行動ができるようになるのではない。	・挨拶をする子供が増えてきたが、個人差がある。先生にだけでなく、友達同士や来校者にも自然に挨拶をする風土を作っていきたい。 ・学校のルールや社会のルールを守ることの意義を子供自身が考え、自身の行動を振り返り、正しい行動を身に付けていく指導を、継続する。 ・チャイムについては、来年度、授業や休み時間の終わりに鳴らすよう試行する。子供にとって、時間の区切りが分かり、切り替えができるかと考える。
				38%	58%	4%	0%					

項目	経営	本年度の 重点	具体的な方策	職員評価 上段取組 下段成果				教員による分析結果	教員による改善策	学校運営連絡協議会委員による評価		学校の見解と方向性
	目標			A	B	C	D			評価	コメント	
その他の視点	健康な体力づくり	体力の向上	⑫体育、なわとび・マラソン旬間、ポッチャ(オリパラレガシー)の機会を活用し、子供たちが楽しく運動し、健康な生活を送ろうとする態度を育てる取組を行う。	35%	65%	0%	0%	○できている。 ○体育週間中は特にその種目を体育で取り入れた。 ○旬間の取り組みはとてもよい。 ○体育週間が多く設定されていてよい。 ●体育的行事機会は設けられているが、体力は落ちてきており、休み時間も校内で過ごす児童が多くなっていると感じる。	・運動に対しての抵抗感を減らしていくため、難易度を変えながら取り組ませる必要がある。 ・年間を通した体育の授業の取り組みを検討する。 ・体育週間ではなく、2週間にして旬間にする。 ・クラスや学年単位での運動遊びや企画実施する。 ・休み時間の体育館使用を割り当てる。	A 2 B 1 C 0 D 0	・なわとび、マラソンと計画的な取り組みが出来たのではない か。 ・休み時間に外で元気に遊んでいる子が多い。教室にいる子もいるが。 ・なわとびやマラソン、ポッチャという取り組みをしてその後に学年や学校で大会をやれば子供たちの楽しいという気持ちが増えて体力が向上するのでは？と思います。 ・保護者アンケートで体力向上にCが14%が少し気になります。 ・主体的に学習する様にする事は大事な事ですが、そこに意識して取り組んでいる事で授業の改善に努めている事はよいと思います。 ・運動を「苦手なもの」「義務」と捉えるのではなく、「楽しみながら続けられるもの」として経験することは、子供たちの健やかな成長にとって重要な要素となる。なわとびやマラソンは、自己の記録に挑戦したり、仲間と励ましあったりすることで「努力することの大切さ」や「継続する力」を身に付ける機会にもなる。また、ポッチャのようにルールを工夫することで、誰もが楽しめる運動の機会があることは、運動の得意・不得意に関わらず、すべての子供が参加しやすい環境づくりにつながる点でも意義深い。	・生涯を通して運動に親しめることを大事にし、体を動かすことの気持ちよさや、できるようになった達成感と喜び、友達と協力して高めていく楽しさと充足感を味わわせるような活動を行っていく。 ・体力向上の面から、体育週間の期間や取り組み方法を検討し、さらに改善していく。 ・休み時間の過ごし方においても、子供が外に出て遊びたいくなるような計画を立てていく。
	資質向上・人材育成	教員の授業力向上	⑬「分かる、楽しい授業」を目指し、研修等に主体的に参加し、授業づくりを行う。(校内研究授業、カフェテリア研修、外部研修会への参加など)	56%	40%	4%	0%	○校内研のあり方を考えたり、カフェ研を充実させたりした。 ○校内研究で授業を行ったり、授業を見て授業力の向上を目指している。 ○カフェ研がおもしろかった。 ●外部研修会への参加はできておらず、積極的に授業研究を行いたい。	・テーマが指導力向上なのかどうか、研修のテーマを再考する。 ・長期休業中等に積極的に外部研修会へ参加する。	A 1 B 2 C 0 D 0	・カフェ研が大きな成果を上げているとのこと。発想がユニークです。 ・主体的に研修に取り組んでいると思いますが、外からはよくわかりません。 ・教員の勤務時間内で研修会等に参加し、授業力向上を目指すことは難しいと思う。教員の負担にならないような方法を考えなければいけない。 ・学びの場は、単に知識を伝えるだけでなく、子供たちが「学ぶことの楽しさ」を実感し、自ら考え、主体的に取り組めるような環境であることが理想である。そのためには、教員自身が学び続け、より良い指導方法を模索し続ける姿勢が欠かせない。校内研究授業やカフェテリア研修、外部研修会への参加を通じて、授業改善のためのアイデアを共有し、実践につなげる取り組みは、学校全体の教育の質を高める大きな力となる。	・若草小全体で目指す児童像を明確にし、そのための手立てを考えて日々の授業で実践していく。 ・校内研究会では、重点をしぼり、アイディアを出し合いながら、皆で授業力の向上を目指していく。また、協議会を通して振り返り、より良い授業へと改善していく。 ・市の研究会では、一人一人の専門性を高めていく。また、学んだことを発信する場を設け、皆で共有できるようにしていく。 ・一人一人が自分の課題と目標を明確にして、外部の研修会に参加したり、資料や書物等で学んだりしながら、課題解決を図っていく。
	ライフ・ワーク・バランスの推進	校務の見直しと職務の効率的な取組を進める	⑭週あたり在校時間50時間以内とし、効率的に仕事を行う。(時間外勤務時間45時間以内/月)	36%	39%	21%	4%	○早く帰るように心がけ、特に若手教員にも声をかけた。 ○残業を減らすために効率的に仕事を進めることができた。 ●意識をして業務にあたっているが、達成できない月があった。 ●行事等、盛りだくさんに取り組んでいる。 ●時間外勤務や、仕事の持ち帰りをしている教員が多い。 ●在校中に仕事が終わらず、時間外勤務が多いうえ、持ち帰っていた。 ●学習の準備や、点検、学校全体のアンケートなどと、勤務時間内に仕事は終わらせられない。 ●全体として意識して取り組んでいると思うが、業務内容が比例して減少しているわけではなく、十分とは言えない。 ●取り組んで改善しようとしているが改善できていない。 ●職場内全体で早めに帰る雰囲気ができているが、家で仕事をするため、根本的な解決になっていない。 ●仕事をすぐに終わらせたいという気持ちから先のものでやってしまい、どこまでやったか忘れてしまうことが課題。 ●やることに優先順位をつけたが、なかなか早く帰ることができなかった。 ●教員がいろいろなことをやりすぎていて全然改善しているとは思えない。 ●在校時間が短くなっても、持ち帰りや休日出勤で賄っている教員が多い。 ●行事前の準備や打ち合わせに時間がかかる。 ●人から見た効率よさと自分自身の効率化は、隔たりがあり、若い人のペースに追いつかない。	・長期的に見ても大切な仕事はゆっくりと進めていくようにする。 ・優先順位をつけて空き時間や朝の時間を有効に活用して仕事を進めていく。 ・アンケートを取るなど一つ一つの取組みを全体で見直すことができるようにする。 ・仕事の優先順位を意識して取り組むように心がける。 ・点検するものは、中休みや授業中にして、仕事を残さないように努力している。 ・業務内で優先順位を決め、余裕をもって準備を進めていく。 ・本当に必要な取り組みをもう少し厳選していく必要がある。 ・できるだけ簡略化し、休憩時間は確保できるように全体を効率よく動かす。 ・毎年使える教材はちゃんと共有をしていく。 ・通知表・内容の見直しを行う。 ・業務分担したり、効率良く仕事を進めたりする。 ・なかなか効率的とまではいかなかったため、優先順位をしっかりときめて仕事していく。 ・持ち帰りや休日出勤の仕事内容を細かく集計する必要はないが、目に見えにくい残業が減るようにしていきたいと思う。 ・どうすれば良くなるのかわからない。	A 1 B 2 C 0 D 0	・週50時間以内だと工夫、努力では達成するのは厳しいと思います。極端に言うと、授業と教材研究だけくらいしか、できないのではないのでしょうか。 ・早く帰る様に若手教員に声を掛け、残業を減らすことで常に意識していることは良いと思う。どうしても持ち帰ってしまい、結果、残業しているのと同じでは改善しているとは思えない。行事内容を精選して必要な事とそうではないことを分ける必要があると思う。アンケートを見直すというのも良いと思います。 ・週当たり在校時間週50時間以内、月の時間外勤務を45時間以内とする働き方を目指し、効率的に業務を進めていくことは、持続可能な学校運営において非常に重要な取り組みと感じる。教育現場では、授業や児童対応に加え、多岐にわたる業務が求められるため、いかに業務を効率化し、負担を軽減させるかが大きな課題となる。学校全体で「効率的に働くこと」を共通認識としながら、無理なく継続できる働き方を模索し、良い実践があれば積極的に共有することで、より良い環境づくりが進むのではない か。 ・若草小をいつも応援しています。	・以前に比べて、人的サポートや物理的なサポートを受けられるようになってきているが、まだ十分ではない。 ・忙しすぎると、教職員に心の余裕がなくなってくる。それは子供にも良い影響を与えない。教職員が「働きがい」をもって、生き生きと働くことができる環境をつくっていく必要がある。 ・働き方改革に向けて、どのように業務の効率化を図れるのか、何を見直せばよいのか、優先することな何か、教職員の声を集めて業務の見直しを行っていく。 ・保護者の方にもご理解とご協力をいただきながら、改革を進めていく。